

<b>Title</b>	自然的・人為的社会不安に関する青年の危機意識を探る：日独青年の社会問題に対する不安感の比較研究
<b>Author(s)</b>	丸山, 久美子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 9(1): 101-118
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=643">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=643</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 自然的・人為的社会不安に関する青年の危機意識を探る

——日独青年の社会問題に対する不安感の比較研究——

丸 山 久美子

Remarks on Social Crisis Problems

—— A Comparative Study of Social Unrest among German and Japanese Youth ——

Kumiko MARUYAMA

People all over the world are constantly aware of the social problems and increasing crime rates (drugs, violence, terrorism, etc.) now tantamount to a global crisis. The most important aspects of these problems have to do with politico-economic unrest and new religions that manifest a loss of values and even terroristic violence. Nevertheless, despite the discontinuities and unevenness, the contradictions and confusions, we are now witnessing one of the most important changes in the history of humankind. In this context, today's youth seem to idealize a return to nature and even to be willing to sacrifice health and happiness today for the sake of their dream of encounter with tomorrow. Ominous signs darken the horizon, however, and preclude facile optimism.

This paper presents a comparison of attitudes toward social unrest among German and Japanese university students. The method employed is that of the questionnaire. Under the heading of social unrest, the main problems are the politico-economic crisis and violence-inclined new religions. These problems are discussed from social psychological and ethnological points of view.

その先祖と子孫についての考察。

唯一なるものよび起こすこの様々な木霊の奇怪さ。

何ということだ。この自我という塊は、おのれの外に、  
様々な部分を見出すのか。……

「テスト氏」 1896 P. ヴァレリー

---

**Key words;** German Ethnics and Yamato Ethnics, Global Crisis in Economics, Violence, New Religions, Loss of Values, Changing Values

## 1：はじめに

人類の歴史を繙く時、人間は相互共存、扶助、共生を理想として生きてきた事実を知ることが出来る。今、世界に氾濫する多民族の風俗、習慣を理解しなければ、たちまち異文化に対する軋轢が様々なストレスを生み出し、到底彼らと相互共存する事など考えも及ばない。この現実、近年益々高まってきている。異文化間コミュニケーションの研究が興隆を極めていく事情も自ずと理解できる。更に、先進諸国は国際間の対立や紛争を回避するための方法を地球規模で模索している。人類の進化は先端技術の開発を促進させ、多くのハイテク技術の進展を遂行するための知的頭脳を輩出したが、それを使いこなす側の平凡な頭脳との間に大きな隔たりを作ってしまった。これ以上、人類の進化が進めば、人類は無限の宇宙の遥か彼方の見えざる大きな「手」の中に握り潰されてしまうかに思える。ギリシャ神話におけるイカルの翼、旧約時代のバベルの塔、古代中国の桃源郷等、人間は夢を見、幻を描き希望を抱く存在である。だが、人間は有限の存在である事から一歩も逃れる事が出来なかった。人は死すべき存在である。如何なる人類の英知を駆使しても、人は死から逃れることは出来ない。

しかし、20世紀末現在、人類は宇宙への旅立ちを可能にする宇宙飛行士の活躍に大きな夢を託している。21世紀の後半には人類は大きな宇宙船に乗って、地球の周辺を巡り歩き、月面に降り立ち、火星、水星、木星など宇宙に散在する地球よりも大きな星の世界を征服する事が出来るかもしれない。かつて人類は鳥のように大空を飛翔することを夢見た。それはSF世界の出来事かと思われた。だがそれは100年を経由せずに、飛行機が空を鳥のように飛び、人は短時間で異国へ、世界地図によってしか知られなかった遠い遙かな異国へと簡単に行くことが出来るようになり、もっと遠い未開の奥地へと好奇の眼差しを向け、実際にそこを探索する事さえ出来るようになった。だが、何千年の歴史や文化遺産を独自に持っている異国人の習慣を理解することは容易ではない。そこに相互共生のいかなる方法が模索できるのだろうか。競争社会に慣れ親しんだ人間は相互共存のシステムに慣れていない。世界は依然として競争世界なのである。しかし、我々は「考える葦」である。相互共存を推進するための潤滑油は、恐らく自分の奥深くに存在する優しさであろう。経済界の重鎮は「タフでなければ生きて行けない。優しくなければ生きて行く資格がない」といい、1994年、遠い北方地帯のリレハンメルでの冬期オリンピック大会では、「人は愛するために生まれた。苦しみの数だけ人に優しくなれるはず」と若人が熱い思いでオリンピック讃歌を歌う。チェルノブイリの原子力発電の故障による放射能漏れによって、更には湾岸戦争によって引き起こされた環境破壊、生態系の破壊に人は「病める地球」に優しい手当を渴望する。全世界が飢えた雛のように「優しさ」を歌い文句にして大合唱を始めた感がある。忍耐の極限は芸術の世界を至高のものとする。文学は作家に極限の孤独を要求する。優しさを文字通り体現した歴史的事実はイエス・キリストの十

十字架の愛である。キリストは最大の憂いを持った人格神として人の心を癒すのである。今日、社会福祉が大義名分に叫ばれている世界において、本当の意味における社会福祉のあり方は「優しさ」に裏打ちされた真の愛を成就する事である。

現代の若者は優しい若者達である。優しさに付随する憂いを持った若者達である。だが、先行き不透明な時代の中で、奇妙な社会病理現象が多発する。その中で、青春を謳歌すべき若者の中に忍び寄る潜在的な不安が彼らを憂いある優しい若者に作り替えて行く。優しい若者たちにこの人生の悲しみの内裏に潜む無気味な近未来を予測できない実状を逆手にとって、逞しくタフに人生を生きることが期待されている。若者の信条はいつの時代にも、現実の凡庸な幸福から顔を背け、荒野を目指して走ることである。

ところで、本来、心理学は神学と決定的に分離する部分があって、「神の痛み」が人間の痛みにも奉仕するなど全く抽象的な思弁にすぎないと思われる。神の痛みを論ずる神学者はおしなべて「人間の真の痛みを知らない」人々の机上の論理であると言われても文句の言えない部分があった。本当の現実的な痛みや死の臨床の場では、理屈抜きで呻く凄惨な人間の苦悶が赤裸々になる。この見解を逆説的に把握すれば、人間は痛みや苦しみ、胸痛む悩みの多くを長い間持ちこたえられない。キリストの弟子として殉教する多くの使徒達の苦しみは、本来の人間の苦しみではなく、キリストの十字架と合一するための信仰的な使命があったればこそ出来ることであり、生理的に解釈すれば、極度の苦痛の中では人間の体内からある種の麻酔薬である「エンドルフィン」と言われる物質によって、痛みつつ死に至る人々を恍惚の状態にするのであるから、キリストの使徒達は苦しむよりも至高の状態です昇天するという解釈が成り立つ。だが、死の床で苦悶する病人を見ている側は耐え難い苦痛である。キリシタン受難の歴史を持つ日本では、残酷な拷問である踏み絵を踏む事が出来るかどうかで、その人の信仰を試す方法があった。踏み絵を踏んで生きている人の方が、逆説的であるが信仰篤く、キリスト教を後世まで存続させるための使命があり、むしろ、キリストはそれを強く願っていたのではないかと考えられなくもない。弾圧の苦しみにも拘らずなんらかの方法で生き長らえる事が苦悶の日々を耐える事の証明でもある。しかし、人間は目先の様々な苦痛や苦悩から遠ざかろうと努力する存在でもある。

ホスピス、リビングウイルが日本でも盛んになりつつある。この営みはまさに優しい人が死に至る病の床にある病人を手厚く看護することである。このような社会問題は基本的に本当の人間の痛みに関わる重大な問題である。「神の痛み」の神学が重要な働きをするはずである。だが、臨床の場では神学はどれ程にも活かされない。そこでは信仰だけが試される。

近年発足した「死の臨床研究会」は医者、看護婦、患者、家族の4人関係のグループ・ダイナミックスのもとで死の床にある患者のQOLを症例研究する場である。

又、哲学者達で作っている死の哲学を考えるサナトロジー学会がある。これは思弁の世界である。患者が呻き苦しんでいる時、「死」とはなんぞやと論じ、いかに精緻な理論展開をしても何の効果

もない。そこで、臨床の場にある医療従事者はこの学会とは合併しないという筋を通した。いまでも、患者中心主義、患者の全人的看護に献身する人々が理屈抜きで症例研究を報告し、QOL (Quality of life, 生命の質, 生活の満足度) を高める方法を模索している。基本的にこのQOLは患者の生命の質をいかにして捉えるかということに重点をおく筈であるから、患者の価値観、生命に対する態度、意見、宗教的感性を十分に良く知悉していなければ医療従事者は、今や死に逝く患者のあらゆる意味での満足感を満たすことができない。しかし、日本では患者の生き様を西欧風の宗教的様式によって取り込む風習はないので、死に至る患者の側に僧侶や牧師、神父、神主などの宗教従事者が登場することを周辺の人々は不吉であるといつて歓迎しないのが実情である。医療従事者はただ患者の痛みを和らげるための対症療法を行うしか方法がない。つまり、モルヒネ等の医療薬を調合するための痛みの緩和処置に追われ、患者の痛みが何とか収まれば、それで満足するという、病床生活の満足を手助けする医療処置者になるだけである。西欧諸国のように、キリスト教信者が8割を越える国では、薬のみでは本当の痛みを緩和することができないので、神父や司祭、牧師などが病床で患者の手を握り、聖書を読み、讃美歌を歌い、キリストと共にある幸せを祈り、感謝して昇天する事が生活習慣になっている。そこにおけるキリスト・イエスは痛む神を内在する怒りに満ちた裁きの神ではなく、栄光に輝く麗しき御姿となって立っている全能の神の御子キリストである。そのような状況の中で、十字架上に血を流す贖罪の山羊であるキリストをイメージする病人がいるだろうか。復活したキリストがヨハネ黙示録に描写されているような恐ろしい形で迫ってくる事などは想像を絶するであろう。

このようにして、修羅場の医療現場と神学の間には大きな溝が存在する。「痛む神」、「憂いある神」が病院のホスピス病棟で一般化されるためには、キリスト教の本質が「死と再生」の「痛ましき手続き」を経て、栄光に至る事を体現するという思想を明確に人々に伝える努力を惜しまずに積み重ねる事が肝要であろう。

本研究は地球規模で発生している環境汚染、組織的犯罪や紛争、人類の精神に重大な影響を及ぼしている免疫不全症候群(エイズ)、「いじめ」による自殺、新興宗教の蔓延、バブル崩壊後の経済的危機等の深刻な社会問題に関する青年の不安感を日独男女大学生の調査結果を比較し、動乱期を迎えた20世紀末現在の様相を見詰め、21世紀を担う青年の意識を明確にして今後の世界を予測するための資料とする事を目的とする。

## 2：ゲルマン民族とヤマト民族

極東の島国日本はその長い鎖国時代を通して独自の文化を築き上げたが、明治維新と共に外国文化、取り分け「ヨーロッパ」の精神構造に対する好奇心が日本の歴史形成に大きく寄与している事が理解できる。大雑把に言えば、明治維新に日本はドイツから多くの知的遺産を吸収し、それらを

独自の文化を築いていた日本に輸入する事で更に独自の文化を再構築したとは言えないであろうか。それとも、多くの民族の集合体であるヨーロッパ諸国の中から何故ゲルマン民族に親近感を抱いたのかと言う疑問は彼らの抱く心根がヤマト民族に類似したものであったからと言う事になりはしないだろうか。ヨーロッパ文化の基底を探って行くと意外に日本の伝説や習俗と共通するものがあり、共感することが多いという。殊に、宗教的な問題になると、ヨーロッパはキリスト教一神教で塗り固められているように見えるが、そこには、かつて日本人が宣教師から輸入した日本的キリスト教とは異質のように思える部分があり瞠目する事がある。ドイツ人の自然に対する憧憬やその生活習慣に根ざしている自然崇拜は、言わば、多神教で、大自然を神々の宿る処と考えている大方の日本人と同じ思考形体ではないかと思われるからである。ドイツ人の中に根ざしている先祖の習慣が子孫に僅かでも伝わっており、キリスト教の中にうまく組み込まれている事は刮目に値する。例えば、キリスト教における「復活祭」はイースター（ゲルマン語の東（イースト）が語源である）と呼ばれるが、そこではニワトリの卵よりも兎が沢山用いられる。兎の形をしたチョコレートが卵よりも多く目につく。これはゲルマン民族の伝承で、イースターは春の女神エオステル（豊饒の神）の祝日であり、動物の繁殖の季節で、人間も兎にあやかって繁殖する事を祝う祭りであると言われている。

キリスト教における重要な教義がゲルマン民族の伝承を丸事抱えた当時のキリスト教宣教師の知恵には多く教えられるものがある。

古代ゲルマン民族は深い森に対する信仰を持ち、森の中に住む神々や精霊に対する信仰と迷信は8世紀以降キリスト教が広まっても、ドイツ人の心の奥底に住み続けていた。その森はグリム童話などに登場する魔女や狼が住む深い緑の「海」のような広大無辺の森であった。キリスト教会がそれを如何に異端と言いつても弾圧しても、農民は祖先から伝承した信仰を簡単に捨てる事はなかった。ドイツの片田舎には古代のゲルマン民族の住居に付随する石の門や屋根の上に刻まれている呪術的な造形はいまだに存在する。キリスト教が神秘的な要素を深めたとすれば、それは古代ゲルマン民族の心がいつの間にか浸透してしまったからにちがいない。しかし、キリスト教と古代ゲルマン民族の信仰は全く相容れない信仰体系である。キリスト教が一神教であるのに対し、古代ゲルマン信仰はヤマト民族と同じような多神教で、自然崇拜をその機軸に据える。ゲルマン民族もヤマト民族も「人間の精神の風土的な構造」（和辻哲郎）で指摘されているように夫々の宗教、文化、価値観などが誕生するための土壌はその地方の風土が深く関与している。キリスト教はイスラエルという乾燥した大地、砂漠の周辺部から発生している。これに対してゲルマンの神々は森の奥深くに住んでいた。人類の思考体系は「森林の思考」と「砂漠の思考」であるとすれば、森の中は見通しがきかずその先に何かあるのかわからないので、山川草木、太陽、月、星などそこに存在する自然の多くは全て神となるのである。一方砂漠は見通しがきき、人間は意識の中では常に高みから下を見下ろしていた。かくして、砂漠地帯では太陽神、嵐の神はやがて唯一神へと移行する。

太陽神が唯一神となったのはエジプトであり、嵐の神が唯一神となったのはイスラエルである。多神教である古代ゲルマン信仰にも嵐の神ヴォーダン（オーディン）が存在した。ヴォーダンは狩猟軍団の首長として多くの神々を率いて行く主神であった。森に囲まれた野原を住処とする古代ゲルマン人にとって、神々は自然の力の象徴であった。

森の中には樹の精や水の精、妖精、小人が住んでいた。多神ではなく、唯一神を信じるキリスト教にとって、神は自然のうちにあるのではなく、自然を超越したところに存在する。それ故、キリスト教が伝来した後のドイツ人は、意識の二重構造を有する事になった。彼らは意識の表層でキリスト教を信じつつも、意識の深層では森林の思考、多神論に対する共感を持ち続けた。そのため、中世のドイツ人の多くは、聖なるものであった森を、キリスト教と結びつけるにいたった。樅の樹は古代ゲルマン信仰における聖なる樹からクリスマス・ツリーへと変化した。キリスト教によって新たな意味が与えられたのである。キリスト教における神は本来は現世や自然を超越したものであるが、ドイツ人の多くは、この彼岸に存在する超越神を信ずるよりも、神の発する聖なる光やその反映を森の中、自然の中に見出そうとした。かくして、ドイツにおけるキリスト教は神秘的な色彩、秘儀的性格を強めていった。森に対する信仰と結びついた秘儀的なキリスト教思想は多くの芸術作品を創造した。だが、近年近代産業の急速な発展のために、ドイツの森はしだいに病み衰え、枯死する現象が起こった。ドイツの森は、いまや「聖なる」ものではなくなった。緑を失い褐色に変色した森の樹々は死にかけ聖なる永遠のものとは感じられなくなった。酸性雨による森の枯死をドイツ人は中世のペストになぞらえて「緑の黒死病」と呼んでいる。東西ドイツの森の総面積の64%がこの病に冒されていると言う（1991年調査）。現代ドイツにおいて環境問題が神経質に問題視される所以である。環境政策に関する限り、ドイツはヨーロッパの中の先進国であり、政党「緑の党」が多くの支持をえている。ドイツ人が環境保護に熱心な事情は彼らの宗教、文化、思想的危機と直結するからである。

ドイツ固有の風土から培われた民族意識が、東方から輸入されたキリスト教をどのように変化させたのかを吟味するとき、第二次世界大戦の当事者ヒットラーの強烈なゲルマン民族意識を安々と甘受したドイツ国家の精神構造が首肯される。ナチズムとはドイツ民族とゲルマン神話を神聖化し、絶対化した民族集団を信奉する独裁的国家全体主義である。彼らは東方から輸入されたキリスト教に着色し、ゲルマン民族的な神話観に基づいてゲルマン民族の血の純粋性を崇高なもの信じ、世界制覇を為し遂げるのはゲルマン民族であると妄信し、ドイツ国内では特に激しいユダヤ人狩りを行い、未曾有のホロコーストを実施したのである。当時、ヒットラーはゲルマン民族の血の純粋性を証明しようとして、人種生物学研究所を創設し、多くの民族学者、生物学者、医学者、文化人類学者を集めて作業に当たさせたが、これは失敗に終わった。純粋な血であると思っていたゲルマン民族の血の中に余りにも多くのユダヤ人の血が混交していたのである。民族中心主義、人種主義は二つの前提の上に立っている。第一は人種は主として若干の遺伝的な心理学的特徴によって特徴づけ

られ、これを破壊することができないこと、第二は人種の心理学的特徴は生理学的特徴と密接に結合している。言わば、共に「血液」の純粋性を尊重し、これを情緒的に高く評価し人種は血液と同一視されている。このような断定は生物学的な因子と社会的文化的因子とを混同したものである。従って、人種主義は純然たる神話学的な創作であって科学性をもたない。しかし、この地球に棲息している人類の中で自分の民族性に誇りを持ち、無意識のうちに愛国の情に駆られて多くの他民族排斥をくり返す民族紛争は無くならない。純粋培養された血統書つきの犬、馬、猫等のペットを高価な値段で売買する事も、血統、血筋の良否で物事を判断する習慣があるからである。もし、これが人間に適用されるとしたら人権問題に発展するだろう。

このような偏向した民族中心主義はゲルマン民族特有のものではない。ヤマト民族は伝統的な君主政体を尊重し、皇室中心の神国意識に支配され、明治維新から第二次世界大戦の敗戦に至るまで列強と対抗する過程において、民族は完全に国家と同一視され、特に戦時中には大東亜共栄圏の指導者であることを自負した。天皇は「現人（あらひと）神」であり、ヤマト民族の宗教は国家神道となり、他の宗教は全て排斥された。元来ヤマト民族はヤマト神話の神道の上に立ち、インド—中国から輸入された仏教を受け入れて信仰した。日本古来の宗教は神道であり、その中核は自然観と先祖崇拜で、地上の森羅万象は神々によって生み出され、神々の司る所とされ、全ての自然に神が宿るというアニミズムの信仰がヤマト民族の信仰の根幹を成す。仏教が伝来したのは6世紀の半ばで、その後政治権力闘争の中で仏教擁護派が勝利を収め、国家の保護の元に、各地に寺院が建立され、神道の神社と共にヤマト民族の精神的文化を形成した。日本は神仏混交教と言われる。ゲルマン民族にキリスト教が伝来したのは4世紀の終わり頃である。ゲルマン民族の宗教は日本と同じく先祖崇拜としての靈魂観、自然観であったが、キリスト教に改宗するとき、キリスト教伝導師はゲルマン人の宗教に妥協して古代ゲルマン信仰の習慣を残した。蛮族古来の神殿は破壊を免れ、神殿内の御神体、例えば、白樺の樹を切ったものや榊を飾ることは一向に構わず、キリストを余り表面に出さず、神殿の中間に十字架を天井から吊り下げ、神と人間を仲保媒介する神の子としてのキリストの生々しい十字架像を人が見える所に置けばよかった。人間の罪を背負って十字架に死んだキリストの真の意味を初めから表面に出さなかった。「神の痛みの神学」や「十字架の神学」などが当時のゲルマン民族の社会的実情にそぐわなかったからであろう。十字架の上で死んでいる弱々しいキリストを神として信仰の対象にする前に全能の父なる強い神が彼らの信仰の対象となる。三位一体の神を信ずるようになったのは後世になってキリスト教神学が確立してからでの事である。

共に似たような歴史的道程でありながら、その精神風土と言語、顔形、宗教的文化の異なるが故に、日独は殆ど異なった民族のように思われている。だが、必ずしもそうとは限らないという事をドイツ人が教えてくれる。それは、いかようにも解釈できる事ではあるが、森の民であるドイツ・ゲルマン民族は山と草原の民である日本ヤマト民族と同じような精神的素地を持っているという事である。両者共に緑なす山、川、森なしには窒息する。彼らを支える意志の力と情念の強さはアン

バランスな性格を形成するが故に、バランスを取るための規律や秩序を取って厳格に実施する。彼らはある種の力に秩序を与え、それを絶対的忠誠心で「忠犬ハチ公」のように守り、大切に思う「ゲフェール」、そこに存在する「ゲミュートリヒカイト」(犬飼, 1991)の内に心休まるのを感知する民族なのである。

### 3：日独青年の深刻な社会問題に関する不安の構造

既に日独大学生の調査で吟味してきたように (Maruyama, Biebler 1995), 彼らの宗教に対する態度はドイツにおいてキリスト教 (カトリック, プロテスタント) は男女総計74.5%, 何も信じていないが17.9%, 日本においては仏教, 神道を合わせて男女総計19.6%, 何も信じていないというのが男女総計75.7%という比率を示している。この結果の信憑性は他の調査結果と比較することによって明確になる。日本における宗教の実際は何も信ずる宗教がないは65.3%, 仏教, 神道合わせると27.7%であり (1988), ドイツではキリスト教 (カトリック, プロテスタント) は72.0%, 何も信じていないのは25.2% (1987) であった (総計数理研究所, 総合報告書 1995 ドイツは1987年当時の西ドイツの16才以上の成人1000人, 日本は全国18才以上の個人4500名)。これらの結果を一望すると, 調査年度が学生調査は1995年度, ドイツ統合前のドイツ共和国は1987年度の調査であり, 8年の間隔がある上に, ドイツ統合以前と以後とでは, 相当な社会変動が生じているので, 必ずしも厳密な意味での比較は出来ないが, 本研究を進めて行く上での参考にはなる。

日本の場合, 若い人ほど特定の信仰する宗教が一般の人よりも持たない。しかし, 驚くべきことに, ドイツでは東西の壁が壊れて以後と以前とでは老若男女の区別なく宗教への回帰現象が生じているという結果を得ている。おそらく, 1995年度の調査はドイツ大学生のみというか片寄りがあるから, 早急に結論を出すことは出来ないとしてもこの種の傾向が大幅に崩れるとは考えられない。

さて, さまざまな憂慮すべき社会問題が生じている。以下に挙げる22の項目から成る社会問題について5段階尺度で測定した結果, 尺度値の平均を列举すると表1のようになる。各々の度数分布図は図1の1~22に図示されているとおりである。此等の項目のうち, 尺度値の平均において差のある項目は※のついたものであるが, そのうち最も差の大きい項目は「テロリズム」, 「経済的状況」, 「新興宗教の蔓延」で, ドイツ人大学生よりも日本人大学生の不安が顕著である。調査時点における1995年7月末は日本において既に報道されているように, オウム真理教なる宗教の仮面を被った武装集団の犯罪が大々的に報道され, マスコミはそれに巻込まれ, オウム真理教に関する実態を血まなこになってスクープした。その結果報道の倫理を欠いた驚くべき犯罪補助の罪を冒したことが1996年4月に判明している。日本国中がオウム報道に沸き立ち, 破防法を適用してオウムの財産を没収してもなおオウム真理教の信者は残余している。オウム真理教の教祖が全て責任を取り, 宗教的反社会的言動に終始したとしても, 恐らくは第2, 第3のオウムが誕生するだろう。バブル

表1 22項目からなる社会問題についての不安の程度

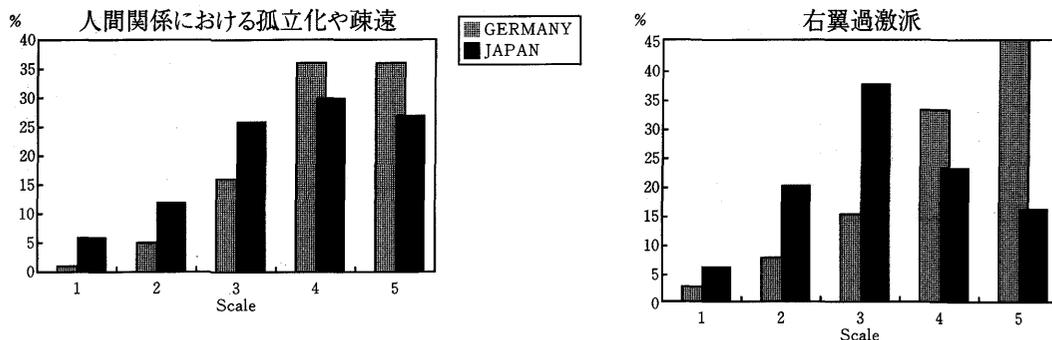
	ドイツ	日本
1：日本（ドイツ）の経済的状況	3.05	4.17 ※※
2：資源とエネルギーの不足	3.29	4.40 ※※
3：犯罪の増加	3.20	4.09 ※
4：国家債務	3.31	3.49
5：出生率低下	2.54	3.31
6：年金の保障または危機	3.66	3.76
7：自然環境の汚染と危機	4.64	4.53
8：失業	4.12	3.69
9：麻薬犯罪	3.04	3.55
10：人間関係における孤立化や疎遠	4.00	3.60
11：日本（ドイツ）に住む外国人	2.22	3.13 ※※
12：組織化される犯罪	3.35	4.05 ※
13：原子力発電	3.48	3.62
14：エイズ	3.31	4.00
15：国家による国民統制の強化	2.77	3.42 ※
16：テロリズム	2.52	3.75 ※※
17：亡命志願者の庇護要請	2.41	3.00
18：右翼過激派	4.13	3.20 ※※
19：新興宗教の蔓延	2.97	4.11 ※※
20：ホームレス	3.59	3.29
21：増大する遺伝子工学の使用	3.19	3.38
22：第三世界における急激な人口増加	3.68	3.87
全項目尺度値の平均 M	3.28	3.71

※平均値の差が0.5以上の項目

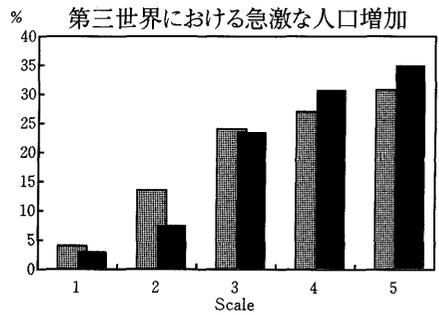
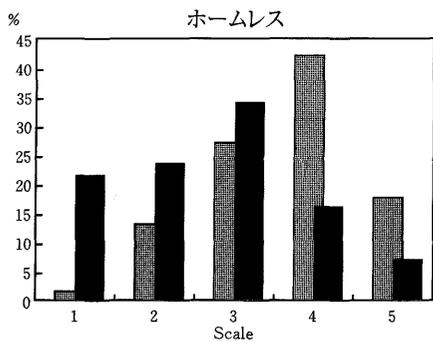
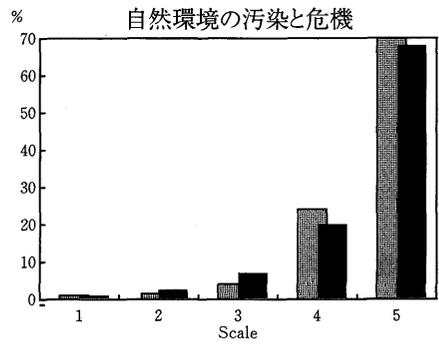
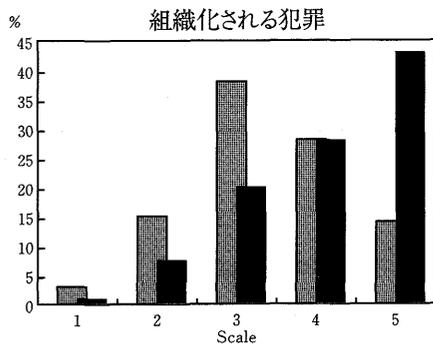
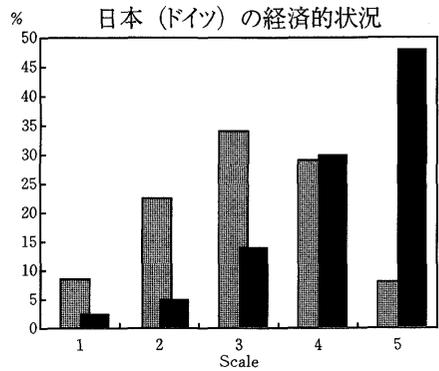
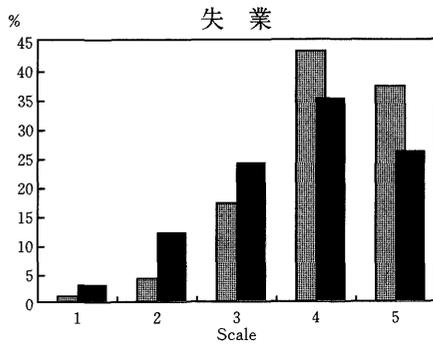
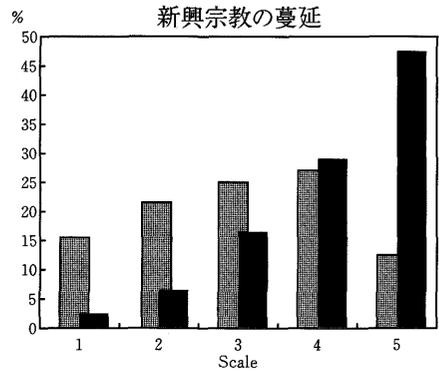
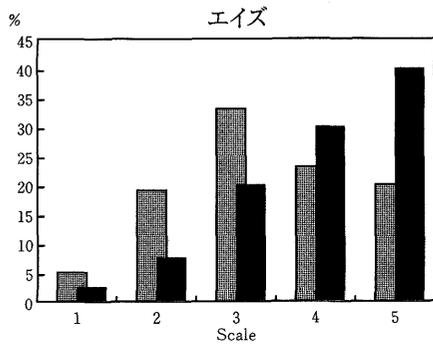
※※平均値の差が0.9以上の項目

崩壊で日本の経済状態は閉塞状態にあり、終身雇用を謳っていた日本の企業はリストラを実行し、青年は大学を卒業しても就職ができないという失業の時代を迎えた。日本の青年の社会不安はドイツ人青年に比較して、殊の外強く、これからの社会に柔軟に対応して行く事が出来るものかどうか

図1-1～22 22項目の度数分布図



自然的・人為的社會不安に関する青年の危機意識を調べる



自然的・人為的社會不安に関する青年の危機意識を調べる

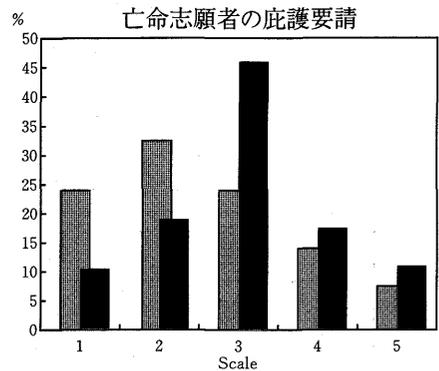
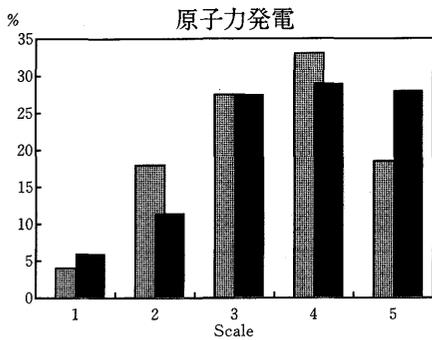
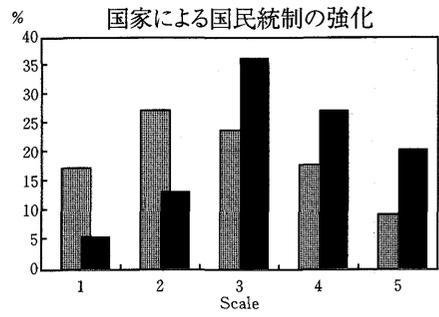
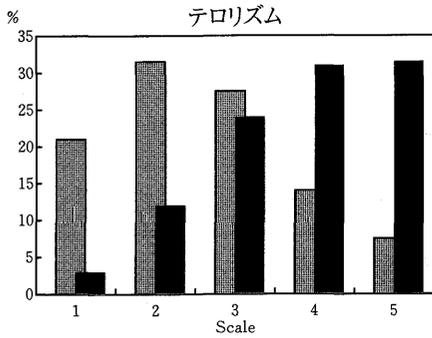
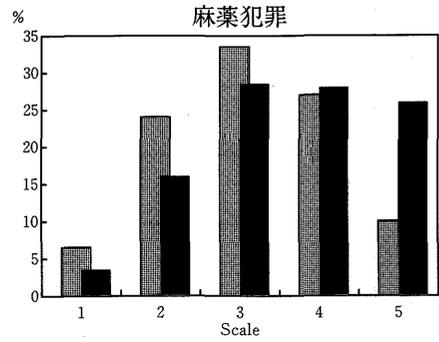
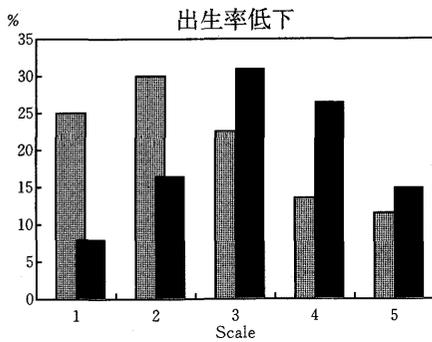
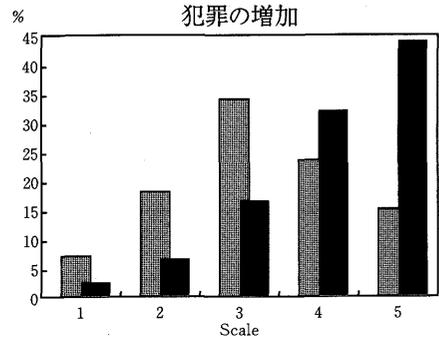
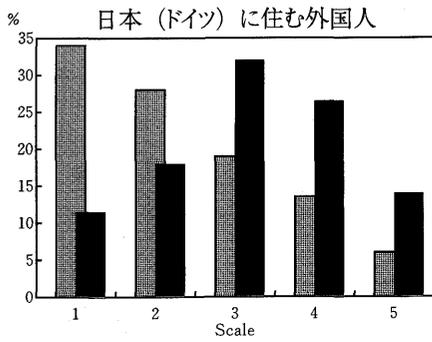


表 2-1 22項目間の距離 (1-Rij)行列 (ドイツ)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
1																						
2	873																					
3	695	1052																				
4	726	836	858																			
5	828	978	822	796																		
6	754	878	722	696	620																	
7	922	702	867	915	945	776																
8	644	880	789	787	875	687	803															
9	800	945	423	899	884	808	845	717														
10	1051	928	859	1094	974	944	750	897	802													
11	858	1094	633	970	814	893	985	949	837	1004												
12	724	994	436	707	986	766	926	726	518	931	846											
13	897	778	1027	910	1009	1059	627	832	980	895	1005	865										
14	841	839	757	913	844	792	660	816	778	833	908	743	658									
15	881	854	1038	958	1052	1024	871	951	1038	800	1047	886	772	853								
16	878	847	650	923	913	802	817	846	598	873	800	541	836	648	824							
17	888	978	627	900	824	802	963	911	780	1067	347	747	1072	888	1028	754						
18	835	884	741	892	1055	884	778	750	731	942	882	753	736	639	800	650	896					
19	888	863	791	871	969	771	873	846	708	811	1051	632	834	867	889	756	983	725				
20	824	873	808	1013	1058	910	722	669	814	691	1035	842	822	740	767	899	1052	673	774			
21	1008	956	1006	1087	1025	1027	819	911	1035	793	980	927	610	804	699	907	1053	861	842	806		
22	1083	766	994	847	969	1004	692	926	917	858	956	879	831	850	830	841	902	1099	881	944	909	

自然的・人為的社会不安に関する青年の危機意識を探る

表 2-2 22項目間の距離行列 (日本)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
1																						
2	554																					
3	692	693																				
4	654	711	606																			
5	862	790	705	768																		
6	784	754	621	663	575																	
7	717	499	633	804	813	646																
8	735	755	652	684	752	614	691															
9	830	834	522	685	740	715	755	562														
10	937	800	782	865	786	716	781	731	703													
11	916	916	820	868	801	768	935	887	855	736												
12	670	747	504	717	814	703	670	651	553	729	830											
13	845	765	731	897	797	727	708	732	689	691	771	693										
14	771	744	663	811	765	694	627	660	591	787	910	654	609									
15	892	858	796	681	857	740	813	652	725	751	874	736	666	611								
16	758	786	597	710	792	713	749	675	582	784	875	447	694	712	611							
17	957	909	787	711	772	736	947	756	661	808	715	780	706	575	712	689						
18	930	936	763	714	813	797	932	694	590	814	907	662	761	670	575	526	597					
19	717	719	738	777	825	541	746	818	818	596	767	676	826	817	670	811	847	751				
20	877	677	688	721	788	759	694	770	770	752	685	663	939	923	731	723	781	787	782			
21	758	785	717	711	817	701	684	682	682	697	734	699	885	844	833	784	827	779	735	667		
22	697	743	778	763	904	806	752	751	751	734	782	818	844	767	845	779	869	727	806	771	636	

自然的・人為的社会不安に関する青年の危機意識を探る

図 2-1 22項目の2次元配置図 (ドイツ)

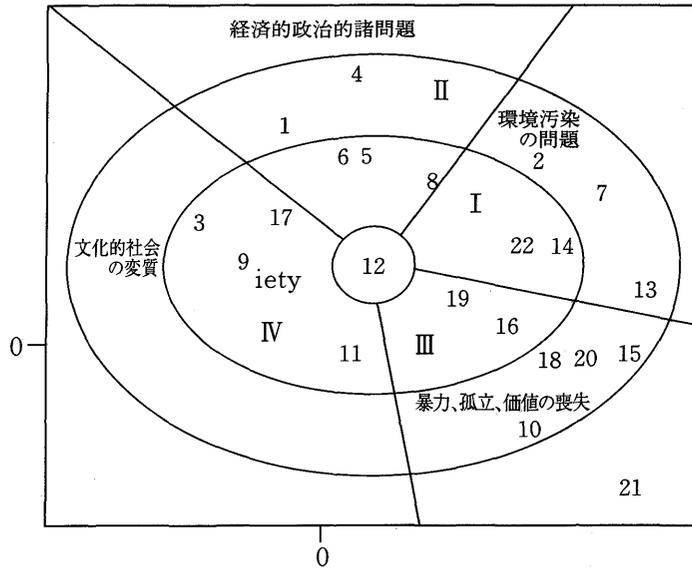
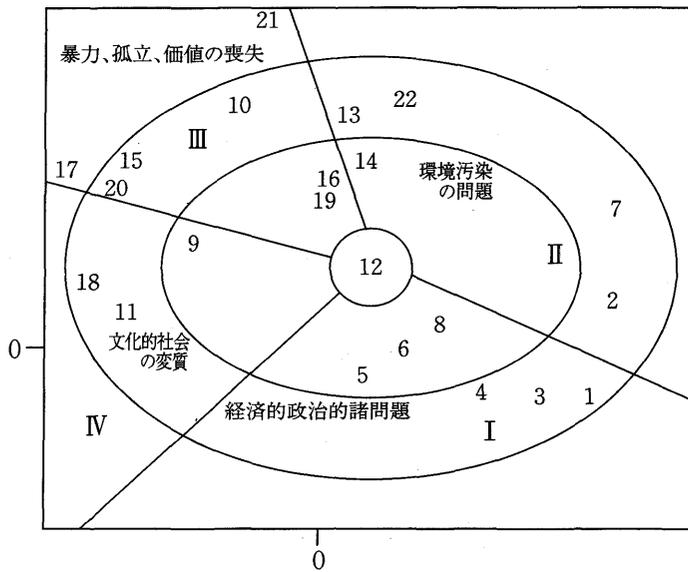


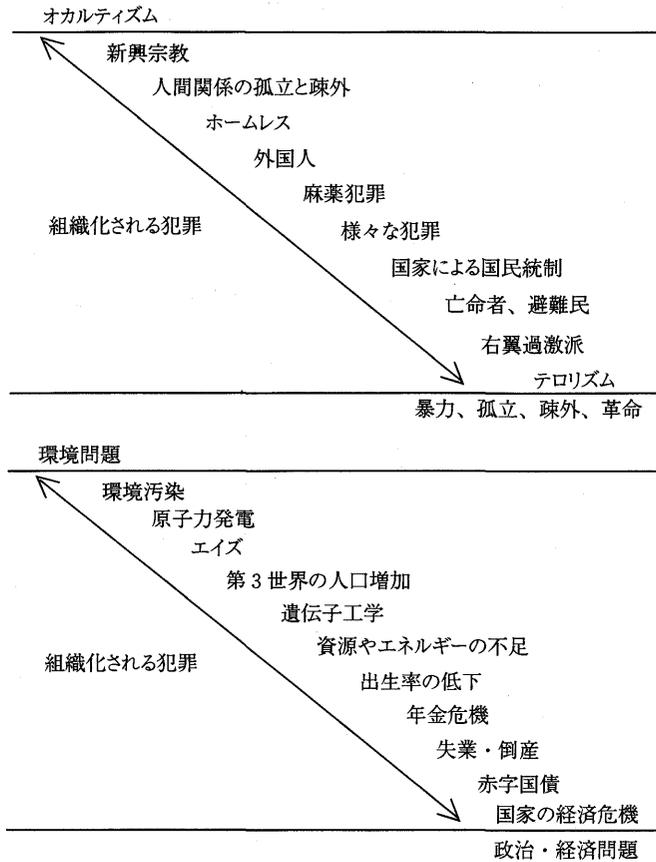
図 2-2 22項目の2次元配置図 (日本)



を暗中模索している様子が垣間見える。テロと経済と宗教が三巴になって右往左往しているのが日本の実情である。ドイツは東西の壁が壊れて以来西側と東側の余りの経済的落差と難民の収容に多くの苦難を背負い、職を失った青年が極右翼（ネオ・ナチ）化して、外国人を襲撃するという事件が発生している。

ドイツにおける環境悪化の事情は日本の考えるような生易しいものではない。まずドイツの風土的現実を眺望すると、まずドイツの冬は昼間でもライトを点けなければ自動車を運転できないほど

図3 仮定された22項目の一次元尺度関係



灰色の汚染した大気が行く手に広がっている事はもはや常識である。ドイツ国内の火力発電や工場の煤煙，車の排気ガスと言った高度文明の負の遺産は言うまでもないが，ドイツはヨーロッパの十字路に位置し，隣接する国々から大量の汚染物質が流入するという危険な荷物を背負わされ続けなければならなかった。黒い森として有名になったシュトゥットガルトの黒い森は如何に観光名物としてドイツに国益をもたらしたとはいえ，森を神聖な神の存在する場所と潜在的に考えているゲルマン民族的森の思考を国民性に持つドイツはこのような隣国から流れる廃棄物に悩まされ，工場廃水が美しいライン河に流れ込んで来るのを防ぎようがない。環境問題を第一に重視した政治政策の課題にし，多くの国民がこの問題に口角泡を飛ばすのは無理もない事実である。

緑の地球を保護するために多くのドイツ人は国際的な仕事に従事している。しかし，筆者の眺めるところ，自然の緑を大切にすることは反対に何と華々しく電車やバス，建物の壁に無造作な落書きが書かれているのだろう。日本流に言えば，かつての全共闘の戦士たちが大学の壁を汚した事実，現在は暴走族の悪戯書きにみるような稚拙な落書きの類がいたるところに描かれている。青年の求める自由は既に彼らの理想を越え，しかし，それは十分に消化されていない。

第3の波（トフラ）が訪れ、全てが、ボーダーレスになった時、「荒野」に花開く華麗な花の香りに吸い寄せられて、歩き続ける青年の目ざす世界をどんな風に思い描くべきなのか。

図1-1, 2は表2の距離行列から抽した22項目の2次元布置図である。これらの図に描かれるように社会的不安問題は明確にラデックスの形態（Guttman, 1954）を持つ。日独共に同じようなラデックスを構成するが、その領域の内容は異なっている。例えば、日本はまず国の経済的問題が非常に不安であるがその領域に犯罪が組み込まれている。ここにおける犯罪は金融犯罪である。所謂、銀行と住宅専門金融機関（住専）の犯罪であり、今日、その穴埋めに国民の公的資金（税金）が投与されるという政治的判断が大きな問題となっている。1995年7月末の調査で、すでに日本人青年はこの現実を予測していたのだ。

このような空間布置図から図3のような仮説的な不安構造が描かれる。既に見たように図2-1, 2からキポイントになっている項目は「組織化される犯罪」であり、この項目の周辺に4つの領域が広がっている。即ち、『経済的政治的問題』『環境汚染の問題』『暴力、孤立、価値観の喪失』『文化的社会の変動』である。そこで、これらの4つの領域を柱にして夫々の一次元尺度を構成すると図3のようになる。明らかに、今後犯罪の質が変化し組織化され、社会の構造変化を促す様々な社会的出来事が地球規模で発生するだろう事が予測される。

#### 4：おわりに

1995年、第二次世界大戦の敗北から50年、荒廃した日本の社会は奇跡的な発展を遂げ世界に確たる驚異的存在として君臨するという期待感が誰しもの心に潜んでいた。平和ボケや拝金主義の行き着く先がある種の未来学者や文化人は密かに警告し、叫び続けていたが、その叫びには切迫感がなく、これら一連の危機意識による発言は、事なかれ主義、成り行き主義を先祖の遺伝子から継承している日本の国民には、殊更、疎ましいと感じられなくもなかった。現状維持肯定的行為を最も好む国民性をここに批判する気持ちはない。だが、今なお考えておかなければならない稀有な出来事がこの50年目の初頭から爆発的に起きた事は記憶に新しいであろう。阪神・淡路大震災から未だ癒えない被災者の呻き、オウム真理教という新興宗教が政治的武装集団、所謂テロリズムへと変貌し、麻原某のカリスマ性と指導力によって地下鉄毒ガスサリン事件、過去を辿れば坂本弁護士一家殺害事件、松本サリン毒ガス事件等多くの殺人事件が浮き彫りにされ、日本の政治に愛想を尽かし日本国乗っ取りを企てた麻原某の狂気を人事のように簡単に片付けてしまうことは出来ない。更に、間接責任という社会的道徳的行動の欠如を赤裸々にした住宅専門金融会社の処理問題で今年度の予算案に公的資金導入を盛り込んだ政府の頑ななまでの行動には全世界が注目し、バブル崩壊後の国民の対応を忌まわしく思わせる不思議な一連の行動が政治不信を増幅させた。50年の節目には、又、日米安全保障条約の更新をしなければならぬ時期を迎えた。沖縄に駐屯する軍事基地の縮小問題

が当面の課題として両国首脳の間に取り交わされたが、それは、今まで全く考えることを禁止してきた日本の憲法問題、特に有事の場合の個別的自衛権や集団的自衛権などの問題を様々な角度から検討吟味することによって、今後の日米安保協定を確かなものにすることを示唆している。日本が平和を促進するための条件は何であるのかを熟慮することが否応なく要請されたのである。もはや、一国平和主義は通用しない。それにも拘らず、世界は一国の平和を守るために紛争を引き起こす。「民族は一つ」というスローガンは絵に描いた餅のようである。

その渦中で、日本の役割を真摯に議論する事が肝要である。天下国家を論じ優れた政府を作ろうと政治論争に明け暮れ、夢のような理想国家を脳裏に描く事が出来る青年を生み出す事が教育であり、社会の責任ではなかったか。それ故、時代の潮流を把握し、認識を深めるための高邁な教育の理念を持たなければならない。とすれば、青少年を「深く考える」事から始まり、教育の場に世界の平和を自ら現実のものとして取り組んでいく情熱を駆り立てる要素を十分に盛り込む教育者の姿勢が問われなければならない。日本における「いじめによる自殺」、「オウム真理教による殺人を肯定する教義とテロ行動」は青少年が深く関わっているだけに世界の目が、この問題の発生時から今日に至るまでの道程を隈無く見据えている。だが、これは一体どういう事なのだろう。報道の理念やモラルの欠如が犯罪事件を助成したという由々しき結果を招来したテレビ報道（TBS）は幾らかの良心の痛みを覚えて現在は自粛の方向にあるものの、今後再び道義的責任を欠いた興味本位で人々の不安を駆り立てるばかりの報道番組が登場しないと断言出来ない。一度の失敗をプラスに変えていく姿勢を毅然と取らない限り、ほとぼりが冷めた時に再度同じ過ちを犯し、精神的貧困を生み出す土壌を拡大するばかりである。いじめによる自殺問題一つを取り上げてみても、この問題は戦後の教育の荒廃（知識偏重の偏差値エリートを造り出すだけで、人格教育を行わなかったために、人格喪失者や責任感を忘れた道徳的欠陥者を無闇に生み出すことになった）であると一概に片付ける事は出来ない。何が原因であるのかは結局、学校が楽しい、面白いという感情が自然に湧き出す場が欠けていることを認識する事を前提として熱心に議論しなければならない。実際にそのような理念をもって始めた実験高校においても、いじめは生じ決してなくならなかったという。とすれば、短絡的に学校の責任を取り上げるだけでは、問題の発生過程に寄与する家庭、それを取り巻く社会一般の問題が積み残されるだけである。今、現在発生している社会的危機問題が相互に相乗作用を起こして結果的にこのような問題を発生させるのである。事は単に表面的なことではなく、抜本的改革の方向へと向かわざるを得ない。これが時代の潮流である。青年はこれらの問題を直感的に認識し感応する能力がある。現在、社会問題として浮上した幾つかの問題は青年が成人になるまでの通過儀礼（イニシエーション）であると考えられなくはないが、それにしても成熟した社会構造が危機に瀕したその瀬戸際で成人に達するまでの様々な経験を青年に負わせる時に、青年を取り巻く大人の責任がなにも問われないとすれば、尚更青少年の魂の不毛を増幅するのみである。

上記の事は青少年の教育に携わるもの全てに与えられた課題であることを強く認識し、「現代社

会が教育に何を求めているか」という問題意識を絶えず模索する事を心掛けなければならないという筆者の熱いメッセージである。

#### 参考文献

- Guttman, L. "A new approach to factor analysis: The Radex" 1954. (P. F. Lazarsfeld (Ed.) *Mathematical thinking in the social sciences*. The Free Press Glencoe, Illinois.).
- 林知己夫『行動計量学序説』朝倉書店, 1994
- 犬飼道子『ヨーロッパの心』岩波新書, 1991
- 北森嘉蔵『神の痛みの神学』新教出版社, 1947, 講談社学術文庫, 1986
- 丸山久美子『緩和医学と臨床社会心理学』社会心理学研究, 第9巻, 第2号, 1994, 123-130
- Maruyama, K. "Social anxiety and consciousness of global crisis in modern youth" *The Journal of Seigakuin University*, Vol. 5, 1992, 129-147
- Maruyama, K. "Globales Krisenbewusstseins und Angst bei der gegenwärtigen, japanischen Jugend" *The Journal of Seigakuin University*, Vol. 6, 1993, 141-162
- Maruyama, K. "Vorstudie zur struktur globalen Krisenbewusstseins und gesellschaftlicher Angst bei der gegenwärtigen, japanischen Jugend" *Behaviormetrika*, Vol. 21, No. 1, 1994, 19-47
- 丸山久美子『20世紀末現在における日本社会の光と影』聖学院大学論叢, 第7巻, 第2号, 1994
- Maruyama, K., H. Biebler "Japanische und deutsche Studenten: Religiöse und politische Mentalitäten im Vergleich" *ZA-Information* 37, 1995, 51-63
- Maruyama, K., H. Biebler "Comparative study of social unrests in global crisis and political attitudes in modern youth" *Behaviormetrika*, in press 1996
- 丸山久美子, ヘンドリック・ビーベラー『日独大学生の「生と死」への態度に関する比較研究』聖学院大学論叢, 第8巻, 第2号, 1996, 191-222
- 小田 晋『社会病理診断』中公新書, 1986
- 産経新聞社会部編『大学を問う—荒廃する現場からの報告—』新潮文庫, 1992
- 高橋義人『ドイツ人のこころ』岩波新書, 1991
- 統計数理研究所研究リポート『意識の国際比較における連鎖的調査分析法の実用化に関する研究—総合報告書—』1995
- Toffler, A. *Powershift: knowledge wealth, and violence at the edge of the 21st Century* 1990, トフラー著 徳山二郎訳『パワーシフト—21世紀へと変容する知識と富と暴力— 上, 下』中公文庫, 1993
- 植田重雄『ヨーロッパの心—ゲルマン民族とキリスト教—』丸善ライブラリー, 1994
- Valéry, P. *Monsieur Teste* Bibliothèque Pléiade 1896, ヴァレリー著, 粟津則雄訳, 『テスト氏』福武文庫, 1990
- 渡部昇一『アングロサクソンと日本人』新潮選書, 1987
- 山本俊一『死生学(サナトロジー)—公衆衛生との関連において—』日本公衆衛生雑誌, 第43巻, 第2号, 1996, 83-85
- 和辻哲郎『風土—人間学的考察—』岩波書店, 1935